1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2890500057		
法人名	株式会社ファイブシーズヘルスケア		
事業所名	まんてん堂グループホームひょうご湊		
所在地	神戸市兵庫区荒田町3丁目82番2号		
自己評価作成日	令和6年12月26日	評価結果市町村受理日	令和7年3月5日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

まんてん堂のグループホームの中で一番最初に開設した事業所ということで、スタッフ一同強い誇りと責任を持っております。またデイサービスセンターが併設されていますので、ボランティアやレクリエーションの情報共有もしており、更に楽しみの多い暮らしの提供に繋がっていると自信をもっております。経験豊かな職員が多く、「自分や自分の家族だったらこうしてほしい。」という考えのもとで日々入居者様と関わらせていただいています。社内の認知症ケア指導員資格を取得し、認知症ケアに精通した職員も2名在籍していますので、職員への助言や指導もタイムリーに行なう事が出来ており、全職員が迷いなく自信を持って認知症ケアに携わっています。今後更に認知症ケアに精通した事業所を目指し、全職員で専門的知識の習得・訓練に力を入れていきたいと考えています。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	認定NPO法人 コミュニティ・サポートセンター神戸(CS神戸)		
所在地	神戸市東灘区住吉東町5-2-2 ビュータワー住吉館104		
訪問調査日	令和7年1月30日		

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

丘陵地の住宅地に建つ、デイサービスを併設した事業所で、近くに流れる川沿いに大きな公園がある。コロナ感染症で途絶えていた地域交流は近隣の方から情報をもらい、関係性を作っているところである。小学校の安全見守り活動や近隣の方も参加できる「まんてん喫茶」を目指し、この冬はできなかったが、玄関先でぜんざいを振る舞う企画を立てたりしている。認知症ケア指導員という社内資格を持つ職員2人が指導や助言を行い、自立支援の視点に立ち、自信を持って支援にあたっている。職員が利用者を連れて買い物に行ったり、個別支援として馴染みの場所へお連れしたり、以前通っていた併設のデイサービスを訪問し、友人も面会に来るなど入居前の関係も大事にしている。医療と連携して看取りも行っており、家族から「此処に入居してよかった」と感謝されている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および第三者評価結果

まんてん堂グループホームひょうご湊

評価機関:CS神戸

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	入社時に会社の理念の説明を受け、それを何時でも見返せるように玄関に掲示して常に胸に刻むようにしている。面談や研修時にも確認する機会を作り、全職員で繰り返し共有している。事業所の理念も会社の理念同様に大切にしている。	法人の3か条からなる理念を玄関やユニットの壁に貼り、ケアを振り返るときのよりどころとしている。事業所独自の理念は職員の意見を募り新しく作成する予定にしている。法人のモットーである「笑顔」の書を額に入れ掲示し、笑顔を大事にしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ流行以降、以前のような交流は行えていない。しかし入居者様との近隣散策などの際には、積極的に地域の方々に声をお掛けして言葉を交わす機会をつくっている。兵庫区内のグループホーム連絡会にも参加し、地域の情報を共有している。	自治会に加入しているが、交流はまだ再開されていない。近隣の方の協力を得て地域との付き合いを広げているところである。音楽療法や園芸のグループの訪問があり歌や、マジックを楽しんでいる。次の冬期には近隣の方を交えてぜんざい会の開催を予定している。	自治会との連携や地域との交流では、小学校の登下校の安全見守り再開や「まんてん喫茶」の充実など考えています。今後順次取組んでいかれることを期待しています。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域活動の参加の機会が無くなっており、事業所の力を活かせていない。ただ今年度後半から集合型の運営推進会議を再開し、地域住民にもご参加いただき事業所の取り組みの実際を直接お伝えする機会が出来るようになったので、今後地域貢献に繋げていきたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度後半より集合型の会議を再開している。当日ご参加いただけない方には電話や書面でお声を頂戴し、サービス向上に向けて皆様のご意見を出来る限り把握するように努めている。会議の内容は議事録にまとめ、ご家族や関係各所にお渡ししている。	運営推進会議には、本人、家族も含め必要なメンバーを揃え開催している。研修や事業所の様子を報告し、ヒヤリハットでは原因や対策を含め報告している。書面で頂いた意見も伝え、議事録は次回案内と意見欄を設け、全員に郵送している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議には地域包括支援センター職員に参加いただき、事業所の運営状況を伝えるとともに、運営に関しての助言や地域の情報交換ができる場となっている。感染症が蔓延した際には神戸モデルを有効活用し、近況報告を迅速に行なっている。	市には必要な報告をメールで行い、区役所とは情報の提供を受けたり、生活保護の方の報告や手続き等電話で連携をとっている。地域包括支援センターは運営推進会議への出席があり、イベントや研修の情報の交換を日常的に行い、顔の見える関係にある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年間2回の研修を実施し、事業所の指針の再確認と実際の事例に基づいて学ぶ機会を設けている。また身体拘束適正化委員会を3ヶ月に1回実施し、自分たちのケアの振り返りと改善点の有無などについても話し合っている。	年に2回研修を行っている。事業所内で身体拘束に繋がる可能性のある事例を検討し、どのような言葉かけをすれば予防に繋がるか話し合っている。一階のデイサービスが開催している時は玄関を開錠し、人感センサー使用時は家族に説明し了解を得ている。	

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年間2回の研修を実施し、事業所の指針の再確認と実際の事例に基づいて学ぶ機会を設けている。虐待防止委員会を3ヶ月に1回実施し、自分たちのケアの振り返りと改善点の有無はないのかなど話し合っている。各所に設置している見守りカメラの確認を定期的に行っている。	年に2回研修を行い虐待防止委員会を3か月に1度開催し、ケアについて振り返り、防止に繋げている。管理者は常に職員の様子に気を配り、気になることがあれば面談しストレスの把握に努めている。セルフチェックから産業医につなぐシステムを利用している。	
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在6名の入居者様が制度を利用されており、後見人とともに支援している。制度の研修は今年度出来ていないので年度末までに実施し、制度の理解を更に深めるようにする。	入居前から成年後見制度を利用し弁護士の後見人がついていない方が6名いる。後見人とは定期的に連絡を取り、情報交換している。家族から相談があるときのために玄関先にパンフレットを置いている。年度末には研修を予定している。	
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居契約締結時には十分な時間をかけ、入居後の生活の不安が可能な限り払拭されるようにご説明している。入居後においても気兼ねなく相談していただけるような声掛けを積極的に行ない、ご質問にもその都度答えている。	見学時に事業所の特色、生活の流れ等を伝え、入居前の家庭訪問でも簡単に説明している。契約時には2時間ほどかけ重要な部分を読み上げている。特に医療の体制や看取り、退去条件等を具体例を交えて分かりやすく話している。家族からは料金の質問が多い。	
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	各ユニットに意見箱を設置し、口頭だけでなく随時ご意見を頂戴するようにしている。運営推進会議で出た意見や、来訪された際に頂いた意見は職員全員で共有し、内容によっては会社に速やかに報告している。	面会に来られた時は直接会い、電話で話す時にも意見を聞いている。また意見箱も置いている。お便り「まんてん堂グループホームひょうご湊」ではコメントに写真を添えて家族に利用者の様子を毎月知らせている。頂いた意見はフロアミーティングで共有している。	
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	36協定にて職員代表を設置し、各事業所の職員の会社への意見や要望を吸い上げている。朝礼や職員会議の時間には、会社の取り組みについて管理者から職員に伝えたり、話し合える時間を持つようにしている。	職員からはユニット会議や普段の業務の中から多くの意見が出る。設備の修理や必要品の購入は所長ミーティングをとおして会社に伝えている。介護や業務の手順については職員間で話し合い改善し、レクリエーションの計画は自主的に企画、運営している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	昇給や賞与は評価制度を導入している。また、面談では個別に話し合って目標を設定し、向上心を持って仕事に取り組めるように努めている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は管理者およびエリアマネージャーと可能な限り連絡を取り合い、各事業所の情報を把握出来ている。事業所単位での内部研修の実施、また法人全体での集合研修の実施など学ぶ機会も積極的に設け、スキルアップに力を入れている。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14			○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	月に一度管理者ミーティングを実施し、事業所間の情報共有や問題事の解決、学ぶ機会がを設け、それが質の高いサービスに繋がっている。加えて兵庫区のグループホーム連絡会に参加し、同業者との関係性を構築しながら情報交換出来ている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15			○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご入居面談～ご入居に至るまでに、ご本人の思いを聴かせていただき、ご要望などを可能な限り把握するようにしている。ご本人からの聴き取りが困難な場合でも、ご本人のお気持ちに配慮しながらコミュニケーション・スキンシップをとり、信頼関係を築くようにしている。		
16			○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービス導入前には、ご本人同様にご家族の思いやご要望なども聴かせていただき、入居後の生活に不安がないようにしている。サービス開始後も、電話やメールなどで積極的に連絡を取り合って生活状況をお伝えし、良好な関係が継続出来るようにしている。		
17			○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人にまつわる様々な情報を、ご本人やご家族からだけでなく、ご本人が関わり合った方からも必要範囲内でお聴かせいただいている。これまでのその方の歴史を大切に考えながら、今後の生活の方向性を検討するようにしている。		
18			○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員本位のケアになっていないか、常に職員同士でチェックし合うようにしている。また、日々の会話などから得た入居者様の要望や希望をどう実施するかを入居者と一緒に考えるようにし、思いを大切にしている。		
19			○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族との関係が途切れないよう、入居後もご家族とともに支援していくことを強くお伝えしている。コロナ感染予防の為に制限していた面会については、現在は条件付きでの居室面会も可能としている。		
20	(11)		○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご家族以外のなじみの関係の方にも来所していただけるようにしている。ご本人が会いたい方がいらっしゃる場合、家族様に確認したうえで電話やお便りを送らせていただいている。	元の職場の仲間が尋ねて来たり、職員が知人に電話をし訪問してもらうこともある。併設のデイサービス利用から入所された方はデイサービスのフロアに行ったり、職員が買い物のついでに馴染みの場所へお連れすることもある。正月は年賀状をもらい会話が弾んだ。	
21			○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者様同士の関係性は職員間で共有し把握している。フロアのテーブル席にも配慮し、良好な関係が継続できるようにしている。日々のレクリエーションや家事、季節の行事などにも可能な限り全員参加いただき、1フロア9名様での暮らしをお楽しみいただけるようにしている。4/9		

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の施設・病院への転院があまりなく、ご逝去での契約終了が多いためその後に関係性を持つことがあまりない。しかし必要に応じては、残されたご家族の相談や心の支えなどに応じる姿勢も必要だと感じている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居時の面談で、今までの暮らし、これからの希望・趣味や趣向をお聞きし、ケアに反映させている。入居後はそのケアの方向性が適切であるのか全員で評価している。居室担当が中心にアセスメントを行い、次のケアに繋げていくようにしている。	入居前、自宅訪問による面談で家族や本人から今までの生活や趣味、仕事、これからの暮らしについて思いや意向を聞いている。日々の生活では食事、トイレや入浴などで各職員が気づいた事は、タブレットに入力し職員間で情報共有し日々の支援に反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	面談の際に本人や家族からこれまでの暮らしの聞き取りを行い、そこで得た情報を全職員で共有している。それを入居後の過ごし方や介護計画書作成に反映させている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	その日のご本人の気分や体調にあった接し方をするようにしている。また表情や体調、身体状態の変化に気付いたことがあった場合は、職員間ですぐに共有している。		
26	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者様お1人に対して1名の介護職員が担当し、計画作成担当者・管理者とともに主となって健康面・ご様子・ご意向などを把握している。それを月1回のカンファレンスのなかで全職員で情報提供・検討し、介護計画書に反映するようにしている。	利用者1人に対し職員1名が担当し、日々の健康面、利用者や家族の思いをケアプランに記し、タブレットで管理している。それらを元に月1回カンファレンスを開催し全職員で共有し話し合っている。プランは状態の変化に応じて速やかに見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々のご様子などは全てタブレットに入力し、重要事項については更に口頭でも伝えて職員間で共有している。状態の変化に応じて速やかに介護計画書を再検討し、必要に応じて変更するようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	急な体調変化に伴う受診・入退院の送迎や個別に必要な物品の購入など、ご家族に代わって行なっている。ご家族の事情や利用者の状況に応じて、可能な範囲内で柔軟に対応している。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29			○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ流行で控えていた利用者との買い物も少しずつ再開し、便利な地域での暮らしを実感していただいている。地域のカフェや各種活動も再開されてきているが、そこへの参加はまだ出来ないため、今後は更に地域資源を把握して積極的に参加することが課題である。		
30	(14)		○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	契約時に協力医療関係の説明をし、そのうえでご家族・ご本人に医療機関の希望有無をお聞きしている。月2回の協力指定医による往診と訪問看護と連携し、必要ならばご家族の協力を得て外部受診を行なっている。	入居者は全員、月2回往診してくれるかかりつけ医を選択している。訪問看護も月2回ある。歯科医の往診や歯科衛生士の口腔ケア指導も月1回以上ある。他科受診は家族の付き添いが原則である。家族とは普段から利用者の健康状態について情報共有を図っている。	
31			○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	月2回訪問看護による健康チェック、こちらからは利用者の状態に応じた報告と相談も行なっている。また必要に応じて臨時訪問も依頼し、医療面でのサポートを万全にしている。医療からの指示が出た際には速やかに対応し、18名様の生活をともに支援している。		
32	(15)		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には医療機関に情報提供を行い、スムーズにその後の治療等に繋がれるようにしている。入院中の治療計画や経過、退院の見込み等こまめに連絡をとり、入院生活が無駄に長くないようにしている。近隣の病院には定期的に訪問し、関係づくりを努めている。	入院時には速やかに介護サマリーで情報提供し入院中も家族や地域連携室と治療経過や退院見込みなどこまめに連絡を取り合っている。退院時にカンファレンスがあれば参加し、食事や嚥下の状態などの情報を入手し、退院後事業所で安心して生活できるようにしている。	
33	(16)		○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時に看取りに関する説明を行い、同意を得ている。また、定期的に家族様の意思の確認を行ない、その都度全職員で共有している。加えて往診医・訪問看護師ともご意向を共有している。	入居時に「重度化した場合の対応に係る方針」を説明し入居後も定期的に家族の意向を確認し全職員で情報共有している。実際の看取りに際しては医師から説明を行い家族の希望を再確認する。看取り中は家族がいつでも面会や宿泊が出来るよう対応している。	
34			○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	社内研修で定期的に緊急時対応の勉強会を行なっている。フロア内に緊急時マニュアルを掲示し、緊急時の為に備えている。訪問看護・往診医も24時間体制で連携しており、連絡経路を確立している。		
35	(17)		○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、昼間・夜間を想定した消防訓練を行っている。参加できなかった職員にも、後日資料を配布し動きの確認をしている。地域の方の参加はコロナ流行以降はご遠慮いただいている。地震・水害の訓練も今年度中に実施予定である。	消防訓練は年2回併設のディサービスと合同で昼間と夜間の火災を想定して実施している。昨年9月に入居者も参加して消防署の指導に基づき実施している。水害時は3階へ避難予定である。備蓄は併設のディサービスと協力して4日分用意し本社からの支援もある。	

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	定期的に、個人情報・接遇・プライバシーの研修を全職員が受けており、その取扱には各自強い使命感のもとで慎重に行なっている。しかし慌ただしい時間のなかで配慮に欠けた発言がゼロではないので、今後も指導や研修など必要である。	入居者の個人情報、接遇、プライバシー保護の研修を全職員が受けている。トイレ誘導のさりげない声掛け、呼称は苗字、同性の方はフルネームで呼ぶ。入室は必ず本人の了解を取る。不適切な言動があった時は職員がお互いに注意出来る職場環境づくりをしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	限られた時間と人員体制のなか、実際にはご本人に希望を尋ねて自己決定していただく場面が少なくなっている。またご自分で意志表示が出来ない方に対する配慮もまだ十分ではない。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な生活の流れはあるが、ご本人のその時々気分や体調に応じて可能な限り柔軟に対応している。ただ、ご自分で意志表示が難しい方に対しては介助者側の決まりで対応しているため、十分な配慮のもとで行なうことが必要である。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご自分で出来る方に関しては、その日の洋服選びや整髪など、ご自分らしいオシャレがこれまで同様に続けていけるように声掛けや見守りを行なっている。ご自分で出来難い方に関しても、その方らしい身だしなみが出来るようにお手伝いさせていたいただいている。		
40	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	職員が全て行ってしまうのではなく、入居者様と一緒に食事準備や後片付けを行なっている。おやつレクリエーションも実施し、1から作る楽しみも感じていただけた。食事レクリエーションの機会がコロナ以降少なくなっているため、これから積極的に取り入れるようにする。	副食は業者が毎日チルドの状態での搬入、主食は事業所で炊いている。きざみ食やとろみ食等は職員が利用者の状態に応じて調理・対応している。おやつレクリエーションを毎月行っている。また月1回「まんてん喫茶」を開催し喫茶店の雰囲気を楽しんでいる。	以前は月2回献立作りから買い物、調理、準備まで利用者と一緒に食事をレクリエーションとおやつレクリエーションを同時開催していました。この行事の再開が望まれます。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者様の嚥下状態に応じた適切な食事形態を提供している。水分量の足りない方には好きな飲料水を購入・トロミも必要に応じて使用している。食事介助は過剰に行わず、それぞれに適した食器や道具を提供し、出来る限りご自分で召し上がっていただけるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時と毎食後にその方に応じた口腔ケアを実施している。その方法については、往診の歯科医・歯科衛生士より指導や助言を受けており、それを日頃のケアに活かすようにしている。		

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居者様の排泄パターンの把握に努め、必要な方には適切なタイミングでトイレにご案内し、トイレでの排泄が出来る限り長く継続できるように支援している。その際は自尊心に配慮して行なうよう声のかけ方にも十分気をつけている。	職員は利用者の排泄パターンを把握し、その人に合った声掛けをすることでトイレでの排泄が出来る限り長く継続できるように支援している。おむつやパッドの使用は毎回の申し送りやカンファレンスで必要性を話し合い家族の了解を得ている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個別に乳酸菌飲料・ヨーグルトを食事にプラスして摂取いただいている。また日々体を動かす機会を可能な限り設けており、薬に依存するだけにならないように気を付けている。こまめな水分摂取もお勧めしている。		
45	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回入浴日は設定しているが選択できる声掛けを行っており、体調がすぐれない時や気分によっては、スケジュール変更など柔軟に対応している。一対一でのケアを行い、衣服の脱着、入浴行為はご本人が出来ることは行なっていたり、難しいところの支援をしている。	入浴は週に2～3回を基本にしている。本人の希望を大事にし気の進まない時は翌日に変更するなど好きな時間に入浴出来るよう配慮している。寝たきりの方もシャワー浴をしている。同性介助も工夫しながら対応している。しょうぶ湯などの季節湯を楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	必要に応じて、昼夜逆転とならない様に配慮した上で日中でもベッド静養していただいている。夜間の睡眠がとり辛い方に関しては、日中は出来るだけ活動的に過ごしていただいたり、就寝前にゆっくりお話させていただく時間を設けたり、温かな飲み物を提供する等している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方されている薬はその内容を職員がいつでも確認出来る場所に置き、薬に関する理解を深めている。薬の変更があった際には、特に注意深くその方の状態を確認し、職員間で情報共有している。必要に応じて速やかに医師・看護師・薬剤師に報告・相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	面談時に生活歴・嗜好を聞き取りし、無理のないように日常の役割分担をケアプランに反映している。また、希望される事を出来る範囲で計画し個別支援している。しかしコロナ流行前に比べて、ご希望に沿えていないこともある。		
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	近隣の散歩やホーム前のベンチでゆっくり過ごしていただく等、その方に応じた外出支援を行なっている。更に今年度からは少しずつ制限を緩和し、買い物など行動範囲を広げている。ご家族にもドライブなどご協力いただいている。地域の方との交流はコロナ以降出来ていないので、感染状況を見ながら再開していく。	近隣の散歩や買い物の機会を設けるなど、一人ひとりの状態に応じた外出支援を行っている。グループホーム前のベンチで寛がれる方、近くの公園に出かける方もいる。徐々に行動範囲を広げ近隣のショッピングセンターやホームセンターに買い物に出かけている。	コロナ禍で控えていた利用者との外出も徐々に再開しています。今後とも感染状況を見ながら、近隣の散歩、買い物、地域のイベント、花見ドライブなど再開が期待されます。

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50			○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	事業所は金銭のお預かりはしておらず、ご自身で管理されている方も居ない。必要な物があった場合には事業所で立替購入し、お渡ししている。		
51			○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	これまで築き上げてこられた人との繋がりがご入居後も継続できるように、携帯電話を所有の方にはご自由に使用いただき、所有されない方は事業所のテレビ電話を活用いただいている。また季節のお便り等もお出しし、その関係性がこれまで同様に続くように支援している。		
52	(23)		○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に応じた作品を入居者様と一緒に制作し、各フロアの壁面に飾ることで四季を感じていただけるようにしている。また状況に応じた音楽を取り入れている。室温は温度計と入居者様に確認し、適切な温度が保てるようにしている。定期的な換気と消毒も行ない、継続して感染症対策も行なっている。	リビングの壁には職員と一緒に制作した季節の貼り絵などを飾っている。入居者の希望によりカーテンを開閉し日当たりを調整している。朝昼晩の状況に合わせて音楽を流している。2時間おきに換気と消毒をしている。加湿器と空気清浄機で適切な温湿度管理をしている。	
53			○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有スペースに、ソファや椅子を配置し自由に使って頂ける環境を作っている。また、職員が普段の様子を確認しながら、気の合う方や個人で過ごしたい方など、座席の配置を配慮している。		
54	(24)		○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご入居前の暮らしの中で愛用されていた物や使い慣れた家具など、居室内に入る範囲内でお持ち込みいただき、生活環境の変化を著しく感じていただくことのないようにしている。ご家族の写真や手紙など、愛着のある物に囲まれた生活が継続出来るように支援している。	ベット、エアコン、カーテンは事業所で用意している。愛着のある家具、ハンガーラック、テレビ、趣味の小物、写真などで設え落ち着いた空間になっている。居室の清掃、シーツの交換は週1回ほどである。居室の入口の名前の横にその人らしい飾りを飾っている。	
55			○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居者様にご自分で迷うことなく目的地場所に移動出来るように、必要箇所には張り紙をしている。また安全に行動出来るように、生活空間の整理整頓に心掛け、事故に繋がらないようにしている。		